

松江大橋

まつえおほし

慶長12年（1607）、毛利に代わって堀尾吉晴が君主として出雲に配置され、新しい首都を松江に選んだ。城を築くにあたって材料を運ぶため、それまでの大橋川の筏橋を本格的な大橋に替えることになった。しかし川底は泥と砂の軟弱地盤で、木杭を打っても基礎が定まらず、桁を架けてもすぐに流れてしまう始末、工事は難行した。そこで堀尾家の土木頭が集まって協議し、人柱を立てることになった。

この人柱伝説には二種ある。ひとつは袴の破れに横縞の布で継ぎ当てをしている者を人柱に立てようという説である。この条件を充たす足輕源助が通りかかったところを捕まえ、川の中央部の橋脚の下に生き埋めにしたというものである。他のひとつは、小泉八雲が妻節子のお話をもとに物語りに書いているもので、襦（内股の部分に足した布）のないあんどん袴をはいている者を人柱にしようとする源助がいき出し、捜したところ、該当するのはいい出しっぺの源助自身だったという話である。いずれにせよ、人柱が立てられたことは事実とみられている。

源助のおかげで水神が鎮まったのか、橋は立派に完成した。しかしその後、日本海に注いでいた斐伊川が流路を変え宍道湖に注ぎ込むようになって、橋はしばしば被害を受けた。

堀尾吉晴の初代大橋、京極忠高の二代目大橋の正式名称はわかってない。三代目大橋は寛永末年入国した松平藩の架けた元明大橋で、以後松平十代の間に架け替えのたびに橋の安寧を念じながら、玉台、蓮台、要津、安祥、文祥、光雲、越栄、速超、寛津、吉祥とその名を変えた。命名は歴代の普門院住職である。松江大橋と命名されたのは、明治7年に造られた十四代目の木橋が初めてである。

昭和12年（1937）に完成した現在の松江大橋は、鉄筋コンクリートの橋脚の上に5径間のカンチレバー桁を載せた堅牢な橋である。橋の中央には、長さ20mのバルコニーがついていて、秀麗なあたりの景色を見晴らすことができる。

この橋の基礎工事が進む昭和11年の晩夏、橋脚の基礎深く降りて岩盤確認中の技師深田清を、落ちてきたコンクリートのバケツが直撃した。彼の死を人びとは人柱伝説と結びつけ、その肖像を彫刻した銅板を基礎深く埋めて、神仏に祈ったという。橋の傍らには、31歳の若い命を橋に捧げた深田清の鎮魂碑が、足輕源助の碑と並んで立っている。

橋の南詰近くの龍覚寺には、2体の源助地蔵がある。ひとつは江戸中期の鑄造、もうひとつは慶応3年の木像である。木像の方は難工事があると盗み出されることが多かったというが、今は無事に寺に収まっている。〔NT〕

竣工年月：昭和12年（1937）10月

所在地：島根県松江市

河川名：大橋川

橋長・幅員：134m×11.1m（車道6.5m+歩道2×2.30m）

径間数・支間長：1×25m（概略）+1×27m+1×30m+1×27m+1×25m（概略）

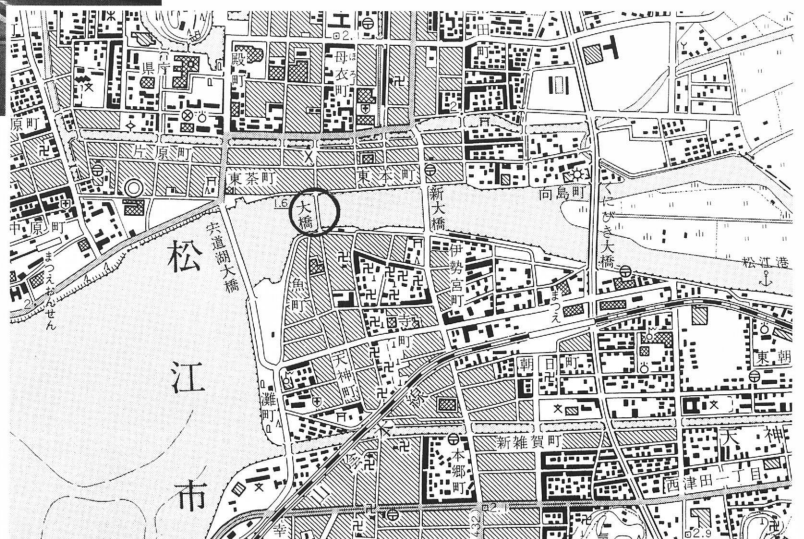
形式：カンチレバーガーダー



〈1984年，撮影・伊東 孝〉



〈1994年4月，撮影・藤井郁夫〉



(1:25,000 松江)